

自由とは何か

四百字 百枚

紙田 彰(かみた あきら)

→

私は私の属しているものを知ることができない。また、私が属しているとされるものも、私を知ることにはない。さらに、私が私を属しているとするものを推測することはできるが、ほんとうは知ることができない。私がこれらを知ることができるとすれば、それはファシズムということであり、私自身の自由からも、あらゆる存在の自由という問題からも遠く隔てられてしまったものについてである。

(話をどこから始めるか?)

私はまずあなたに問いかける。あなたは私自身であるかもしれない、また私の隣のあなたであるかもしれない。また、私とはまるで無関係なあなたであるかもしれない。しかし、いずれにしても、私は問いかけるためにあなたを必要としている。だが、私が問いかける事柄はどこからやって来るものなのか。あるいは、いつやって来るのだろうか。そして、ほんとうに問いかける事柄があるのだろうか。けれども、来たるべきものはやはり来るのだという予感はある。しかし。

そもそも、私は何を問いかけて、その問いかけがどのような意味を持つのかをいまだに知ることができない。何を考えようとしているのか、何を始めようとしているのか、私にはまだ何も見えていないのである。

おそらく、私は何かの一部に問いかけているに違いない。その一部がどのようなものか、一部なのかは永久に知ることがないだろうが、たしかに何かの一部分であるということに誤りはないだろう。私の考えはこうだ。私はあらゆる「部分」に侵襲されている。

来たるべきものはたしかに「部分」のうち

にあるだろうし、あなたはその来たるべきものに違いない。しかし、来たるべきものは来ることはないし、いつも私の外側にあるものだ。

また、それは無垢というものと関係があるのだろうか。私が無垢でなければあなたが無垢であるということがある。そもそも無垢であるということは許されざるものなのか。そして、そのことが侵襲される理由であるのか。それはごちらとあちら、私とあなたがひとつになることを拒むもの。

私が考えているのは、あなたがこの議論の内部にあるのではなく、表層を部分に持つ、見えないもののその表層の部分なのではないかということだ。だから、私が問いかけるあなたとは、私の影であるというべきではなく、独立した表層の部分というべきである。

あなたはどのような場合でも、あなた自身である。そうだ。私が問いかけようとしたのは、そのことなのだ。私はあなたであるか? 「あなたは私であるか?」あなたは私ですか? 「あなたは私ですか?」あなた自身の場合において、あなた自身の何ものでもないのだから、私はあなたではないし、あなたは私ではない。

このことは次のような問いかけでも同じである。「私にはあなたが見えるのか?」「あなたには私が見えるのか?」「私はあらゆる場合においてあなたを見ることはできないし、あなたは私を見ることはできない。」

では、私はあなたに問いかけることは可能なのだろうか。また、私はあなたに問いかけずに私としてありつづけることが可能なのだろうか。もつとはつきり述べるなら、私が私に問いかけるといふことはありえないし、それは絶対不可能なのだから、あなたに問いかけることが不可能なら私は絶対の沈黙を余儀なくされる、私のあらゆる問いかけが存在しな

くなる。

あなたは私にこう答える。「そのように考えることが、すでにあなたが『あなた』と呼ぶ私の一方の考えであり、その私の一方の考えが、あなたの考える一部でもあるはずだ」「けれども」と、あなたは付け加える。「あなたの私への問いかけは、私になされたものなのか、あるいはあなたが発しえたものなのかは定かでなくなってしまうている。そもそも、そのような問いかけが行われたのかどうかさえ明確ではなくなってしまうている」

たしかに、もうすでに私の中では、そのような問いかけは跡形もなく消失してしまっていた。そして、「あなた」という言葉の証拠すら残されず、私は私の表層を見つめていた。

2

あなたは私に属しているのか？ 私がそのような疑問を抱いてから数日たった夜のことである。それは、私に属するはずの意識のひとつ、肉体の部位としては大動脈の腹部にある解離性の瘤と繋がっているもので、その大動脈瘤の持つ意識ともいえる。意識Aは次のような来歴を私に語り始めた。

Aが自らを知りえたのは、大動脈に突発的に生じたときではなく、私がAの病理的な存在を認めざるをえなくなった時点であった。Aは最初、私の願望から、自らが一時的な存在で数カ月もすれば瘤としての形は失われるかもしれぬと考えていた。しかし、結局、瘤は閉鎖することはなく存続しつづけた。

「私は、物理的に大動脈に生じたときに誕生したのか、あるいはあなたが私の存在を信じたときに誕生したのか、私自身よく分からないところがある」

またAは、A自身が血管内に生じた空洞としての物理性であるのか、空洞を造る血管が持つ特殊意識であるのか、あるいはその両者の統合体であるのか、はたまた医学の捏造なのか、私の信仰あるいは妄想であるのか、自分で確かなことは分からないと繰り返した。「だが、あなたは肉体を持つているのか？」私はAへの問いかけをこのような言葉で始めることにした。「あなたはAであるはずだから、Aの意識を持つ身体という統合的機能あるいはある一つの機構としてたしかにあるということはいえるのだろうが、血管にできた瘤という、つまり空洞である以上、肉体を欠落させられているといえないだろうか」私はもうひとつの疑問、空洞という肉体はありえるのか、いや肉体はそもそも空洞を包み込んだもの、肉体の本質は空洞にあるのではないかという疑問は、ここでは差し控えることにした。

Aは「私自身にとつては、肉体の欠落感というものは意識することはできないのだが、私という空洞の反対側、つまり二種類の血管膜のそれぞれの向こう側にあるものは、不可視であるとはいえ、隣接感はある」と応じた。そして、ある重要な問題を提起した。「その直観は、存在を予感することはできても、何ものをも見ることも、本質に到達することもできず、隣接する感覚はあっても、生起している現象に遭遇することはありえないといえるのではないか。血管の層をなす外膜と内膜の向こうにしか、私にとつては推測できる世界はありえないし、あなたにしたところで、またあなたの一切の問いかけにしても、私の推理でしかないということが、私の本質を決定づけているに違いない」

大動脈の偽腔であるAの意識は私に以上のような問題を突きつけたのである。

偽腔Aは向こうにあるものだが、つねに向こうであることを余儀なくされる。外膜、中

膜、内膜と、私は外側から推測する。偽腔 A は三段階の膜層そのものであるが、その本質は充たされたものではない。彼はすでに自分がたんなる肉体の概念であるということ認めざるをえない。そして、そればかりではない。偽腔 A は提起する問題についてつねに何も無いところから始めなければならないのだ。それだからこそ。

肉体の部位は実質で充たされているということは不可能なのだ。部位のいたるところは空洞で、部位を構成する細胞も嚢状の構成物である。肉体の思想は空虚から始められている。それだからこそ。

肉体は肉体に語らせよ。このときの肉体とは部位としての肉体である。身体は機構であるが、肉体はぶつ切りの個体であり、想像力を根拠にする個体。そして、生命活動を続ける以上、それぞれの空洞に生か死を選択する意志があるはずなのだ。いや、意識といったほうが明確になるかもしれない。肉体の部位が独立して何かを感じ、思惟し、肉体が肉体の意識をゆらぎ立たせて蠢きはじめる。脚や腕の関節はもとより、内臓や生殖器、体毛、爪、さらに細胞の一つ一つが自らの意志を、それと気づくこともなく、意志を立ちのぼらせる。

私は何のことについて述べているのだろうか。おそらくそれは、神秘主義や機械主義的な外圧を持たないで立ち上がる部位の、いわゆる肉体の舞踏と一つのことをイメージしているに違いない。肉体に任せよ、ということとは可能である。しかし、身体に任せよということとは不可能なのだ。肉体は肉体の意識を律動させるが、身体は肉体を統御している。

3

私から最も遠いところから、その痛みは伝わってきたのかもしれない。それとも、その

距離は、痛み自体がもたらしているのかもしれない。支えるものが稀薄になれば、それだけ速さはいやましてくる。支えるものとその意識が私自身から離れていくときに、痛みの速度は直接的な物質性を私に示してくる。それは、まるで痛みがつねに隣接しているように、私そのものに侵襲してくる。べったりと貼りつき、その接触面から貫通してくるのである。

わたしはわたしの中の生きものたちのことをつねに意識していて、ともすると、いくつかの別々のかたまりの形でわたしの方に寄り添ってくるのを感じることもあるの。それはまぎれもなく複数の、別々の意識の重なりとでもいえるし、もつと具体的な、透明な膜の向こうに蠢く生命活動の原初の連なりとでもいう実感がするのよ。

女性の意識の中にある、母性を感じる特有のインスピレーションと関連しているのではなく、ひたすら愛おしいようなつかいような匂いを伴いながら、自らを衝き動かさざるをえない、ある種、運動する他人たちの気配、ふるまい。

でも、あなたの方に向かうときは、あなたのためたひとつの側面を頼りにただつながっているにすぎないのかもしれない。そして、そのようなわたしが、あなたにとつてはわたしたちが、無数にその側面を埋めているに違いないのよ。わたしのこの疼きが一定の充足感を伴い、そのようにしてわたしの存在を示すことにつながっているのだけ。

そうよ、わたしのこの欠落する意識が、あるいは充実する意識が、ときには痛みとなり、ときには痙攣となり、ときには甘い麻薬となつて、あなたに浸透していく……。

神経細胞のつらなりを流れる電気信号と痙攣。その痛みが細胞体の不安なのかもしれない。秒速百メートルにまで達する速度を持つ、

その予期しない叛乱、再生できるのかできないのか。変性による死への予兆が神経線維の端から端まで伝播する。

私を覚醒させた痙攣が示すものは、こうした肉体の叛乱とでもいうるものなのかもしれない。それはこの場合、前駆的にふくらはぎの外側にある筋に硬質の痛みを現し、たとえそのとき眠りにあるとしても、痙攣の予感を持続させていく。

私はその予感とそこから生まれる怯えによって、その意識、長い神経線維を伝播して行く長く、細い意識に、眠りを圧迫されつづける。

4

わたしが囚われているのではないことを、あなたが示すことができるのだろうか、それともわたし自身が……。

わたしを一方的に支配する意図はなくても、支配していることには変わりはないし、もちろんわたしを愛さねばならないという気持ちも、さらにわたしによってあなたが救済されるかもしれないという期待も感じられるわ。でも、それこそあなたの瞞着、傲慢さ、掴みどころのない循環。

あなたの表層はときとして硬くわたしの内側に訪れる。また、いつのまにかやわらかく弛緩する。この硬直は支配を認めさせること、この溶融は憐れみと後悔。けれども、わたしの満たされぬ時間の中では、どれがわたしとあなたとのつながりの本当の姿なのかを、わたしもあなたも見出すことはできない。

わたしはわたしの内側から内側へという二重の外側へくるみだされ、その猥雑に絡んだ襷をたどり、さらにその底にある深い磁場へともぐり込んでいく。二重螺旋への下降、永遠の。そして、ここでまた問題にぶつかってしまふ。けれども、それは何かを生み出すための二重性ということなのか、あるいは生み

出されるわたし自身への下降ということなのか。いずれにしてもわたしから発している問題に遭遇しているということではなく、あなたが提示した答えに囚われているということになるのだわ。

わたしはそのようなわたしをどのように抑圧すべきか、そうすることでこれから生み出すすべてを許すことができるかどうか、憎むことができるかどうか、またそのようなわたしがそれにもましてあなたを要請していることも、またあなたがわたしに期待するすべての事柄をわたしも期待していることにゆき当たってしまったっている。あなたはわたしの内側をいつそう慈しみ、わたしはあなたへの期待を慈しむ。

私は私の軟らかい部位に温かな吐息を感じることで、ある種の熱狂を思い起こしていた。それは小波のように跡切れることのない繰り返しの感覚である。これまでどのくらいの回数の訪れの感覚があったか、またこれからのどのくらいの数の訪れを知るのだろうか。今までのどのくらいの数の訪れを得ているのだろうか。私はあなたの内側から私のこの感覚によって受け容れられているに違いないが、はたして私が受け容れているということをおあなたは知っているのだろうか。

横たわるあなたを愛撫したとしても、私がおあなたに重なつたとしても、私の表層が壊れてしまふわけではない。私は逃げられないし、そのことを知っているからここにとどまっている。ただ迷っているということなのかもしれない。それでも私はあなたの内部に囚われている。私が望んだもの、欲望したもの、命じられたもの。あなたは崩れようとしている。切なげな表情と喘ぎとで。

私はあなたに人間的な親愛を覚えているわけではないし、またあなたがそれを望んでいないはずのことも充分理解しているはずだ。

私はあなたをたしかに包摂しているのだから。

わたしはあなたの表層と接点を持って
いるだけで、あなたとはつながっているわけ
ではないと、どうしても思いたいわけがある
のよ。わたしは、その理由について、わたし
から言いだすことはありえないのだけど、た
しかに強い理由があるのを知っている。わた
しもあなたを愛しているはずがないし、これ
からも愛するはずのないことも、またあなた
を憎むこともありえないはずだもの。わたし
はわたしを、あなたと区別する必要があるの
よ。わたしはあなたに侵略され、屈服させら
れ、あなたを埋め込まれているからだわ。こ
れは屈辱であるけれど、おそらくあなたにと
ってもあなたの汚点。あなたが愛してい
るのはそのことなのかもしれないのよ。

5

それは、ある青みを帯びた灰色の夕刻。そ
の灰色の濃霧の向こうに薄黄色の光芒が垣間
見えるが、こちらの側は絶望の濃紺の帳に蔽
われているだけだ。さざに時間はくつがえり、
かすかな光も忘れ去られていくに違いない。
私の底部の秘められた闇、稲光がたえず閃
くように、抑えきれない衝動的な葛藤がつま
ぬく暗黒。そのような憤りを生み出すのが何
によるかを知るものが、いったいどこにいる
というのだろつ。

最初から存在する物質を想像することは不
可能だ。そんなものはありえようがないから
だ。けれども、生命の底部、その発生の向こ
うにあるものを知ることもないといえるのか。
数億年の皮質の蓄積を経て、皮膜の底に沈澱
したものは甦ることはないのだろうか。傷つ
いた中枢神経はすでに恢復は不可能だといっ
ことなのか。あらゆる歴史は殺戮の連鎖に違
いないとはいえ、いまだ拭い去ることのでき

ない衝動が忘却という形で記憶されている。
思い出すこともなく、忘れ去られることもな
く、古い皮質は傷つけられたまま。

知りえぬということの罪障、根深い疑い、
想起するにいたらないための焦燥。つまり、
古いもの、気の遠くなるような底部に、そも
そもから用意されているはずの空虚というイ
メージに起因しているもの。だが、たしかに
私自身がその意味するところの真実とその正
体を知ることが不可能なのである。

私が傷つけるはずのもの、私を傷つけるは
ずのもの、それらは私に対して何をもちた
らすものなのか、またそれゆえに私をどのよう
に扱おうというのだろう。私はそれらの鋭い侵
襲によつてほんとうに傷つけられているのか、
ほんとうに何ものかを傷つけているのか。

それははたして、私の部位を、それぞれの
精神を、無数にある意識自体を、さらにもつ
と古くからある傷を重ねて、それは醜い癩痕
となり、それぞれの表層に複雑な皺となつて
残される。もう、元には戻らない、戻ること
はありえないのだ、と。

そのとき私はめくるめくような暗い情熱に
衝き動かされて、私の外部に牙を、矛先を向
けざるをえなくなるのだ。それは、決して内
部に振り下ろされる斧ではなく、外に向けら
れるべき一撃。振り下ろされつつける打撃。
だが、暗く熱を帯びた暴力が突出するのは、
その一瞬だけである。その後は冷酷な暴力の
残渣が機構として無際限に繰り返されていく。
深傷を負うのは私の表層であるが、すでに亀
裂、破碎は全体へ及びはじめてしまっている。

そもそも原因がおれにあるというこ
とはありえないが、かといって原因がもたら
す次の原因からも無関係であることにはなら
ない。そのことはおれ自身もよく分かっている
つもりだ。おまえの場合とは異なつて、お
れが完全な抑圧の環境に置かれることを願つ

ている部分がおまえにはあるに違いないが、なぜそのような願望をおまえが所有する必要があるのかを、おれは許しがたいものとして、おれの深まりの底に沈潜させているのだ。

だが、それにもましておれにとって真に許しがたいのは、そのようなおまえではなく、おまえを通じたおれの向こう、おれを通してたおれの向こうそのものの、連綿たるつらなりであるに違いないのだ。

おれはただ血を見るのが好きなのでもなく、肉が裂け、骨が砕け散るのに快楽をおぼえているわけでもない。なぜなら、破壊されるものはおれ自身を含んだ、おれの不幸でもあるのだから。

おれはただたんにおれ自身を壊滅的に追いつめることにおれ自身の理由を見出そうとしているのかもしれない。

9

灰色の夕暮れの第二景。ふるえる心臓。このとき、つきぬけるような戦慄を、私はたしかに感じていた。だが、それは実現不能な範疇にある行為なのである。自らを放棄することとで生起する衝動、自らを犠牲的につらぬくつらなり全体の無化への企み、それはあまりにも無意味な行為の突出であるからだ。それゆえ、すでに行為ではなく、切り離された行為の断片なのである。

しかし、その衝動の素戸こそ、突出する暴力、暴力の突出とでも名づけうるものである。私は彼が、彼の皮膜を破裂させることで、私と私を通じた連鎖の階梯すべてを自らの内部に閉じ込め、閉じ込めた内部の樹木として、自らとともに無化させようとするその無意味な意志を感じていたのである。

宇宙にも皮膜はあるのだろうか。宇宙は何もないところから、つまり何もなしところの

高エネルギー状態から生成されたに違いない。なぜなら、そこから百三十七億年分の膨張エネルギーを奪ったのだから、それに引き合う分のエネルギーが何もないところの内部に凝縮していたということになる。そして、宇宙誕生のとき、何もなしところにはエネルギー状態における境界があつたのかどうか。もし皮膜があるとすれば、それはその境界の状態ということになる。そして、膨張しても、その境界が広がるだけで、やはり宇宙は境界の内部にとどまっているのでないか。つまり、永遠に宇宙は皮膜の中にある。皮膜の中にある宇宙モデル。外から見れば、やはり何もなしところなのだ。

世界は外についても、内についても、何も知ることとはできない。世界は時間と空間の幾何学だから、時間の階層についても同じである。過去の時間も未来の時間もほんとうのこととは知ることとはできないし、現在についても同じかもしれない。生きていくというのに、存在しているというのに、何も知ることのできないこの不条理。物理的宇宙は知性において、私を抑圧するものなのだ。そう考えたとき、暴力的な衝動が高まってくるのを私は感じていた。

だが、世界が円環を結び、宇宙が閉じているかぎり、反世界も反宇宙も、ただ世界と宇宙に包囲されている人形にすぎない。はたしてそうなのか？

私自身、世界によって抑圧されていることは間違いないし、同時に彼を抑圧していることもまぎれもない事実である。だが、だからといって抑圧を正当化することが可能なのかあるいは可能だとして、何をもって可能であるかというのだろうか。

おそらくここに過誤の種子がひそんでいるのかもしれない。また、そのことがあがきを現前させている。二つに引き裂かれる意識、

引き裂かれることによって増殖する意識、あがきがいたるところにあふれ返る。われわれに自由はあるのか。

私は救われることはない。彼もまた救われることはありえない。だが、何から救われるというのか、何が救うというのか。あるいは、私は彼を救うことが可能かもしれない。私を救うということを犠牲にして。いいかえれば、彼を犠牲にすることで私が救われるということになるのかどうか。また、彼が自らを救うことが可能だとして、それはそのようなことと同一のことなのかどうか。だが、自己救済は自らの内部によってすべてを包囲することであるはずなので、この場合、そのようなことはまた別の問題であるのかもれない。

だが、この救いがたさはどこからやってくるのか。そのことも大きな問題であるといえる。私と彼は、すでに分ちがたく、その問題とも結びついているからだ。

おれがおまえとの関係の形を変えること、また関係そのものをも消滅させることができないと断定するべきではない。おれが囚われているというのは、おまえの側からの見方で、おれはおまえとは完全に無関係であるともいえる。また、視点を変えれば、おまえがおれに属しているのだともいえるということ。すでに記されているのだから。許せないもの、許さないもの、また許すということ、許さざるをえないこと、したがって許しを乞うことにあるのではなく、おれに許しを乞わせるもの存在とその強制が、あらゆる暴力的形態を剥奪していく。威嚇の形をとらない恫喝。

おれのこの暴力の突出とは何か。あるいは暴力への期待とは何か。それは理性的であるか、非理性的であるかにかかわらず、普遍的な暴力、裸の暴力とでもいえるものだ。も

ちろん抑圧する側の暴力もそこには含まれるし、抵抗する側の暴力もそこには含まれる。磁力が臨界に達したときも、また磁場を失うときも 暴力の突出は期待される。

彼は、私がすでに失いかけている暴力の意志を呼びさまし、私の抱いている暴力への期待を費消させようと企んでいるに違いない。私もまた彼と同じ場所で踏み迷っているのであるから。

7

地表すれすれで棲息しているのは私ばかりではない。蛇のように低い吐息を這わせているおまえたち、闇の匂いを蓄積させた路地の、地べたの種族。

おまえたちは蹲っているような沈潜の仕方で、地面に沿って平たくのびきってしまっている。実際、おまえたちはすべての存在と同様に個々の曲率に支配されて、それゆえに永遠の平面にまでのびきっているはずなのだ。

むっくりと体を起こしているのは、やはり影の部分。その影の奥のつらなりの影の内部というものにその根はあるのだろう。根があるというよりも、その存在は裏返された形のままの空虚であるに違いない。影の中の影の部分も体をもたげ始めた。影のつらなりのすべてが、永遠の鏡像のすべてのつらなりが、同じ傾きをもったまま、ゆらゆらと体をもたげ始めている。

私はおまえたちにとらえどころのない類縁性を感じている。それは、おまえたちのいずれかの特質に、かつて私の何かが関わっていたことがあるということなのだ。私は、すでに私ではない別の私の系譜を思い描いているのかもしれない。それとも、いまだその呪縛と密接に関わっているともいえるのか。

私は自分の生まれた場所を知らない。そのことと関係があるのかもしれない。地面への思い入れ、裸足で土に触れることのやすらぎ。根を下ろし、体を支える根拠がほしいのだ。そして、地べたにはたしかに母の匂いと父の匂いが相まって情緒的な風がそよんでいる。ただ、それだけだ。しかし、私は連鎖だということをおもい知らされる。連鎖への懐かしさが甦るとはいつたいどういつことだ。それはゲノムに対する降伏の白旗なのか。懐かしさは弱さなのか、それとも諦めなのか。ひとりであることの寂しさ、地面に抱かれることの救いがたき。なんとという裏切り。

おまえたちは私を呪縛する。しかし、私はその呪縛が私に属しているのか、私を属しているものに関係しているのかを知る術がない。懐かしい匂い、体の奥が引きずられるようないとおしき、脂にまみれた感触、体をくるむ体毛の記憶、何も考えることのない安逸さ、身をゆだねることの持続。

おまえたちは答えない。答えることを退けているのではなく、答える必要のない持続があるばかりだ。私はただおまえたちを通して、呼びさまされる何かを感じている。それが何であるかは別にして。それはそれぞれの内部に根強くあるものではなく、表層のありように起源するものなのかもしれない。なぜなら、つらなる無限の鎖はそれぞれの磁場を形成し、それらの磁力によって影響しあっているはずだからだ。

腐りかけた足をこつして引きずりながら地を浚い、あるいは地べたを爬虫類のように滑り回るおれたちの姿を、おまえは自分自身の影であるかのように思い違いしているのかもかもしれないが、それはおまえ自身がおまえを見失っているか、忘却しているか、あるいは実はおれたちのことを遠い昔から知りえていたという錯誤に起因しているに違いない。

おれたちは起き上がるものすべての起源に関与している、無窮の平面に沿うもの来るべき未来に関与している。それは汚れた暗い血と得体の知れないものどもの婚礼と交合と裏切りに充ちているからだ。

権力が婚礼を支配する、このことを肝に銘じておくべきだ。誕生も、血の相続も、おまえを支配するものへの従属の聖痕を与えられているのだから。呪うべきはこの連鎖たる影、影をつなく連環、永遠の過去、永遠の未来、永遠の現在を貫くもの。

支配するものを受け入れることは許されない。屈服することは許されない。私はそのことを忘れてはいるわけではない。権力は何にもまして狡猾なのだ。私を招き入れて抱き寄せる。そして骨抜きにして暗い夜に放り出す。重い鎖を首に巻きつけ、足枷さえも括りつけて。さらには、血のつながりをつくることであまたの奴隷を生み出すのだ。

しかし、おまえたちは闇にありながら立ち上がるものだ。そして、おまえたちの住む地べたは土と岩だけでできているのだから。

私は、おまえたちがなぜ、知ること、つまりすでにあることの認知とは無縁なのかを考えざるをえない。おまえたちは二次元を颯爽と滑降し、その視線の先には地べたに記されたありうべくもない系統樹がある。おまえたちこそ、すでにあつたものではなく、ありえぬものの具体化に関与しているのかもしれない。与えられた(つくられた)知の発見ではなく、その 与件の発見としての知 のそもその出自を疑い、それを自らの創出によって覆すための。

だが、それでも、私は繰り返さざるをえない。生命の連鎖、DNAの継承の前に。

滋養とさせられる存在、啖われるもの、ただの肥やしだ、亡霊になってさえも！

地面を引きずって徘徊するその意識は、決して地面に引きずられてはいないのだと叫ぶ。だが、天井からは継母の祝福されざる黒い血が滴り、屋根裏部屋の床一面には重力の破産を示す熔解した天体の落下の痕跡が見られるのか、あるいは生々しい肉そのもの……。すでにこの世を後にした意識は、物質と物質との関係は、意識と物質、意識と意識の関係でもあるのだと言いつ残していた。その意識が向かったのは、向こうから押し寄せてくるものがとつてい看過することのできない反撥と激突とでもいふべき鋭い亀裂。

意識Bは逃れること、逸脱することはできない。だが、本当にそうなのか？ ももちろん、BはB自身をつなぎとめておく。そうするとBはB自身にとって誰なのか？ BはB自身を押し潰そうとしている範囲に囚われているだけで、その一部、あるいは付属しているものではない。たしかにBは奴隷のような存在であることを強いられるが、敵意を失っているわけではない。Bは堪えているに過ぎないのである。何に？

私はここで素朴な疑問に直面する。その薄い皮膜がどちらに属しているのかを、いったい誰が知っているのか。

まさに私 が息を終えようとしているその刹那に、私 を唆して飛び立たせようとするものがあるのだ。私は羽撃くものではないし、翼、鱗、跳躍に適う強い脚をもつものでもない。天使のように無残な光輪も、醜く硬直した幼児的な微笑も持たない。ただ、たしかに深い憎悪と鋭い敵意を抱きながら囚われつつづけている、まさにその接触面にいるのである。私 を解放しようとするものが現れ

たとしても、私はその欺瞞と悪意を見破り、何ものに対しても完全な侮蔑と敵意を失うこととはないだろう。私 はあなたに対してさえも、またこつした自分自身の重複せざるをえない意識の連鎖に対してさえも、私 を囚えているものに対する反抗と同質の 反抗への意志 を欠かすことはないだろう。

意識Bは遠い宇宙の起源、物質の起源の記憶を持っているのだろうか。完全なる反撥とは対称性と関連している。粒子と反粒子は、どちらがどちらを生成させたのか、あるいはどちらが起源なのか。そこには電磁力というよりも重力の秘密があるようだ。空の状態から物質と反物質が生まれるということは、空の場からさらに二つの対称性を持つ場が生まれたということにならないか。空は消滅するが、重力はそれをこの二つの対称性に分かつと同時にその根元であるから、そもそも二つは重力によって惹きつけあつたのだ。そして、いずれ、遠い距離と時間を経て元に回歸することが予測される。

意識Bは孤立した反抗者だが、生成したのか分裂したのか、内包なのか外延なのか、いずれにしてもそこには徹底した反抗する分身が存在するようだ。

意識Bの分身であるBは、Bと同時に、異なった磁場でモノローグをつづける。つまり、Bのことは底にBのことは含まれ、Bもまた匿されていたのである。そのBはすでに失われた者たちの列の向こう側にあり、暗い眼窩の奥にある空虚は蒼く錆び落ちようとする**ことばの炎**に閉ざされている。Bにまつわる記憶といえば、ことばの持つ磁力と重力の激突を想起させるハレーションというべきかもしれない。ただ、ときおり、血腥いものが曲面と曲面のつなぎ目、曲率の移動するあたりに沁み出していた。それはBが重力を認識しはじめたから、Bの内部へと沁み込

む重力の形象。B'の内部はBの失われた領域、非在という部分。

6

皮膚などはたしてあるのか。BはB'に対して方向性を持つている、と仮定される。なぜならBとB'には互いに異なった磁力が存在しているからだ。BとB'の引力と斥力の混沌は極大に達しているかもしれない。そうだとすると、それは何に起因しているのか。

異なった磁場を持つということは、皮膚の内部がキュリー点に達し、そのことによって、それぞれの磁力が崩壊してしまつていふことなのかもしれない。いずれにしても、方向性などはまるであてにならない。

意識Bよ、私の内部にはおまえなどいたためしはないのだ。私はおまえとは無関係な領域におまえという非在を内包しているのだ。しかし、それは二つの意味で、おまえは私を絶対的なものとして捉えてしまつていふこととなる。つまり、私がおまえと無関係だという点においておまえは私に關係を強制しているといふこと、また非在を内包していると私にいわしめることで、私の非在を明かしてしまつていふといふこと。そのような混乱が増大すれば、元には戻らない。私はもはやおまえを認識さえしていないのかもしれない。相手のいない謔妄に陥つていふ私、磁力に従つていふといふよりも、意識Bそのものに遷移しているといえるのだから。意識B'を喪失したおまえそのもの、意識Bとして。

皮膚は確かにあるのだ。BにおいてB'は隔てられたものだ。重力と磁力が溶融しているような状態ではすべてが見えなくなつてしまふように、皮膚のあちらとこちらとの磁場がそれぞれに高温にさらされているのかもしれない。

い。その安定しない状態にあることで、あらゆる事象との結合が容易になつていふのだ。

あるいは散乱現象。Bにとつては皮膚が熱によつて混濁すればするほど、内部に押し込められることからいつそ分離した場所にいることになるのだから。

斥力は引きつけあつた力をその出自にしているはずだが、その根元であるすべてが平坦な場所、つまり力のすべてが内側に押し込められていふ状態を原因にして弾けてしまつていふといふことになるのだが、それはじつは跳ね返る重力といふものを、そして重力はどこに行きつくのかといふことを暗示させざるをえない。

だが、問題はBやB'も純粹分離してはいるのではなく、意識と意識であるといふことだ。いや、そうではなく、「その意識」であるといふことなのだ。

意識はそれ自身で存在できないのだから、そのことからどのように脱け出ることができるといふのだろうか。そのようなしだいであるから、意識Bと意識B'は連続的に抑圧されているに違いない。何に？

けれども、熱を帯びて全方向を失ひ飛び散つていく意識Bと意識B'は互いの空間的距離、あるいは同様にすべての記号と記号との間の距離を広げていく。みるみるうちに。そのことは、みるみるうちに時間的距離も広がつていくといふことだ。時間も空間も個別だから、力といふつながりを残したまま新たな皮膚に囚われていふことになるのかもわからない。もちろん、低温状態のそれぞれは独自性を獲得し、つながりを見ることはできない。なぜなら、ものともとの間はすっかり晴れ上がつていふからだ！

そして、限界まで離れてしまつと、新たな問題が発生する。すべての力が重力にすりかわつていふのだ。それは、ふたたび死と強制の道を意味するのだろうか。引きつけあつて

と、結合していくこと、宇宙の全重力がすべて重なっていくこと！

私は私の意識が多重性をもち、複数の重なりであることを否定するつもりはない。私自身を含めて私の意識たちが囚われているに違いないことはうすうす感じている。本当のところ、私たち意識の問題は、私をとらえている私たちの直接的な皮膜にすべて起因しているのだと。私の意識がいくら重力についての議論をしていても、意識におけるすべての問題はこの直接的な身体機構にあることを。

10

(肉体そのものである意識)

では、足の裏にも好きなようにさせてしまえ。真夜中だろうが、突然の、一瞬の、激しいひきつり！ 痙攣の後の長い長い苦痛。「そうだ、私を好きなようにさせてくれ。すでに文字として書かれ始めたときには、文字の画数が半分とんでしまう。それは省略しているのではなく、欠落。私自身が欠落しながら、それを取り戻せないで、取り戻す必要もなく、ひたすら好きなようにさせて！」欠落した関節の部位は回転しようとするのではなく、軟骨との接触を断ち切るようとして、痙攣を始める。

わたしにも、思いあたることがあるわ。

わたしの義父にあたる老人が植物状態に陥る寸前。皮膚の表面と血管と神経はそれぞれ独自の塊をなそうと、白く、赤く、青く、土色に、まだらに、ぶつぶつと、それぞれの部位を不規則に膨らませ、縮める。一晩中、顔面を痙攣をさせ、こめかみの静脈が通常の十倍には膨らんで、縮み、顔面の神経が異物のように激しくひきつりつづけ、唇や顎がとめどもなく意味のない運動をし、眼球はあてど

なくぐるぐる旋回する。一晩中、まさしく一晩中、脳内で異物が暴れ回るように、人間の顔のあらゆる奇怪な動きの可能性をすべて現してから、彼はただ一度だけ、意識を取り戻したわ。そしてその直後、まる一年間の最期の眠りについたのよ。それは、まさしく肉体そのものである意識！ 直接的に感情のない身体構造。

いいえ、それは違うのかも知れない。たんに無知の、切り離された意識なのかも知れない。どことも結びつかない、切り離された、分離された部分。でも、それは部分というべきではなく、分離され、別個のものとして、独立した全体というべきかも知れない。別の全体ともいえるそれは、何かを知ることができるのかしら。全体でしかありえないそれは、そのことによって、たんなる空っぽなのかも知れないのに。

よくいわれるソクラテスの無知がそれらの部位の存在理由であるとすれば、その部分は遊離しているのではなく、包括的に独立しているということになるかも知れない。それは知的な認識という回路を必要としているのではなく、たんに気づかないでいるというだけなのかも知れない。あるいは気づこうとしないで気づかないふりをしているということではないということ。単純に、あるいは純然として気づかないということ。だから、君はどこにいるのか、または君は誰との関係なのか、と問ったところで、その質問ははぐらかされるのではなく、ただ吸引されて、戻ることとはない。無視されているのではなく、空っぽの向こうに吸収されつづけていくのである。だが、気づいていないことと知らないこととは根本的に違うのと同じように、気づくことと知ることは永遠に結びつかない。自分が自分の内部にある空っぽ、あるいは内部にならずの空っぽに気づくことは不可能だが、自分が空っぽの部分を持つことは知りうるし、

まさしく空っぽ以外の何ものでもないことを知りうることは可能なのである。

だから、無知の部位は叫ぶことが可能なのである。あるいは叫ぼうとすることが可能なのである。けれども、もちろん、その方法もことばも知ることはない。「！」、イクスクラメーションマークの非在。

二

(幽霊についての挿話)

その形象が訪れたのはそのときだった。音もなく開く扉。爛々と光る眼球の気配。薄汚れた長い布を肩からすっぽりまとった何ものかが暗い空間に漂っている。

おれの末裔、おれの分身、一族の者よ、幽霊は語った。いや、語ったわけではない。そのようなことばの渦を闇の中に注ぎ込んだのだ。

生を享けて以来、おれは悪逆の念としてこの世界を呪い続けていた。おれは特別な悪人だ。だが、どうしようもなく純粋な血を持った者だともいえる。おまえたちの母親はみな自ら進んで、このおれに抱かれたのだから。

そのことばを呑み込むことは困難だが、なにかしらぼんやりと寛いでいて、なつかしい匂いを嗅いでいるような気がする。しかし、幽霊は物質として存在していた。夢魘や妄想の類とは思われなかった。手を伸ばせば確かに触れることのできる、もそのものの性質にあふれていた。長い髪の毛や顎を蔽った髪、全身を包んでいる布が、窓から侵入する夜風に煽られ揺れている。けれども、その質感、その波打つ動きは金属的な硬直性を持ち、機械的な顫動を思わせた。だからなおのこと、幽霊の表情や仕種はこの世のものとは思われ

ぬ脆弱な印象を与えていた。自働人形のぜんまいが跡切れようとして、最後の瘡にうちふるえる瞬間のごとく。

その繊細さは、いつでも存在を何か別のものに転換できる性質の現われでもあった。肉体そのものよりも、それ以外の部分に濃厚に感じられる存在感。表情や仕種の妖異さ、独特の雰囲気は、おそらくそのような部分から発しているのだろう。見つめつけると、あまりに酷薄な冷気が伝わってくる。それはまさしく空間の虚無だった。身も心も凍結させる空虚であった。

おれが何ものなのか、おれの本体が何であるか、おまえは見なければならぬ。おれはありきたりの蒙昧な亡霊どもとは異なるのだ。いいか、よく見る。おれの衣の下を見る。

闇に鎖されている部屋の中で、幽霊を中心に、夜より暗い、真っ黒な渦が巻いている。いたるところで微細なまでに振動する空気の、その全ての粒子が、全身の肉壁に鋭利な歯牙となつて喰い込み、噛みついてくる。幽霊は振り払うような素早さで薄汚れた布を放ち、その大きな布は嵐の海面を漂うように宙を舞った。布の向こうに捉ええたのは、凄絶な青味さえ帯びた、どこまでも貫いて透き通る空間だった。何ももない荒涼とした空虚、無そのものの上に、首だけが浮かんでいた。そして、空洞に固着した首が奇怪な表情のまま硬はって、こちらを睨めつけている。

どれほどの長い時間が経過していたのだろう。ほんとうはわずか寸秒のことだったのかもしれない。浮游する顔は初めから色彩を失っていたが、首だけになると、褪色した薄い皮膚はみるみる濁び、ついにはかさかさになって剥落していくのである。鼻梁や耳朶もその形を崩し、軟骨がこぼれ落ちる砂のように

さらさら音をたてて空中に四散していく。ただひとつその姿をとどめているのは、剥き出しになった裸の眼球である。網目状の毛細血管に絡みつかれ、燠火や鬼火を思わせる血の塊となって膨んでは萎む眼球が、闇の中で妖しく炯々していた。

なんというおぞましい事態。死そのものの無機性である頭蓋骨の中央で、不吉な生を暗示する怪異な二つの眼球の蠢き。それは、睡眠時の瞼の下で活潑に跳ね廻る眼球運動の、見ることへの異様な執着！

髑髏は空中の一箇所にとどまることをせず、後方に退いてはまた目前にまで迫り、まるで球面を無軌道に滑りつつづけるようにしてこちらを威圧し、執拗に、見る、よく見るのだ、と繰り返している。そのうちに、骨の廻転体に象嵌されている眼球の、青灰色の中心近傍も、どんより濁った暗灰色に変じ、血脈によって隈取られていた暗褐色の外縁部も、濁いた黒い色へと色調を落としていった。それからしだいに眼窩の間へと沈んでゆき、そのあたりは落ち窪んだ翳りだけがつつく深い洞窟を思わせた。

形骸と化した髑髏はなおも飛び廻り、幾度となく目の前に迫ってきては、純白に光る歯ばかり並び口蓋を噛み合わせ、まるで喉笛に喰らいつこうとでもしているように見える。闇に浮かぶ白い髑髏、それは己れの軀を捜し求めているかのようだった。

おれは頭蓋骨だけで生き永らえているのだ。おれの輪廻転生はこの頭蓋骨に凝結し、おれの呪いも、おれの残虐無比も、ここにぎわまっているのだ。

髑髏は宇宙の一点に静止して、闇の根源である暗黒点のよつに、そこだけ無限の深い暗がりをつくり、暗箱の中にかありえない絶対黒色の描線で、頭蓋骨の全ての稜線を描き

出していた。

わが裔よ。数億年を古りたわが血の族よ。おれたちは頭蓋骨だけで生きています。おれたちの永劫の魂はこの骨の中に封じられて、決してどこにも去ることはないのだ。おれたちの肉が滅びようと、おれたちは地を充たす地の塩となつて、死ぬことはない。時がおれたちの味方だ。世界の滅びも、おれたちには無縁だ。

おれたちは純粹に本来的であつて、冒されるべきものではない。なぜなら、わが眷属は人類の唯一の始源だからだ。おれたちにはすべてが許される。わが眷属は神なるものさへ凌駕する族だからだ。

数億年を経た黴臭い澱んだ空気が体内を侵してくる。なつかしい死者たちの塩が、脊索動物ゲノムの歴史が、部屋に、体内に充ちている。名づけうべくもない戦慄、その兆し。

闇の本体と化した髑髏は、全ての暗黒を呼び寄せる動きを終熄させたように見えた。そして、その暗黒自体がまるで光の性質をもつもののように、漆黒の闇を黒々と燦かせた。

次の瞬間、髑髏は周りの何もかもを根底から破壊するような凄じい速度で部屋の中を疾った。その行手には光を遮るカーテンと窓がある。遮断するあらゆるものが吹き飛び、大きな爆発音とともに粉々になるさまが予感された。そして、粉碎時の轟音が耳に達したかのよつな錯覚に囚われる。

しかし、髑髏は窓に衝突すると同時に、まるで吸い取られるような具合に、音をたてることもなく、忽然と姿を消したのだった。

12

意識、このことは何を何の定義もないままに使うことを浅薄だと、私は断定できない。たしかに、感覚と情緒に深入りすればそれはつ

ねに危殆の淵を辿ることになるだろう。そして、そのことについてそう裏切られつつける。しかし、私はそのことばを、従属する意識あるいは抵抗する意識として使っているのかもしれないし、あるいは反意識という意味で使っているのかもしれない。ただ、だからといってはたして意識ということばを定義して用いているのかいなのか。

ところで、また別に、幽霊の挿話ではそのことについていくつかの問題が提示されている。すなわち、「形象」が現れる。爛々と光る眼球。長い布を蔽ったもの。暗い空間。形象だよ、形象、これが肝心なんだ、という異の方角からの幽霊の声。これらは叛乱の予兆であるのか。そして、意識たちははまだ頭蓋骨に閉じ込められているのかどうか。私が捉えている複数形の意識は、第一義的には脳内の部位において形成されるもの、次には肉体の部位から神経線維を伝播してくるもの、さらには最下層に棲息するもろの細胞から押し寄せてくるもの。これら原意識とでもいうるものは、脳内で処理され、統合意識となつてまたたくまに頭蓋骨に閉じ込められてしまふ。しかし、脳内で統合処理されれば、それまでそれぞれであつたものがすべてなくなつてしまふのだろうか。

いったい、だれがどのような方法で、そのような削除をするのだろうか。あるいは圧殺のマジック。私は考えざるをえない。細胞それぞれの思いは脳に届くか届かざるにかかわらず、恒常的に発生しつづけて蠢いているのではないかと。

また、肉体と意識は頭蓋骨の内部において支配されているのかどうかという疑問。頭蓋骨自体が身体機構そのものであるのか。あるいは身体メカニズムの筐体といえるのか。それとも、肉体を抑圧する牢獄、その法制化。さまざまの問いかけの前に立ちはだかるのは、

頭蓋骨という骨格的根拠である。たしかに骨格という強制と境界は、外界との遮断によって、あまたの肉体部位、細胞、意識を調教し、馴致させるに充分なのだろう。それは暴力的な抑圧、信仰の飴と鞭。秘蹟と犠牲。無知の無知。食物連鎖。ああ！ ああ！

けれども、骨格が支配しているというわけでもない。法が支配するというデマゴギーにたらしこまれていく人民よ！ 頭蓋骨は容器であり、良くも悪しくも悪徳の秘密を保護し、隠蔽する修飾機能でしかない。これも単なる細胞の集合体であるからだ。たしかにむきだしの肉体を蔽う頭蓋骨は牢獄というに相応しく頑丈で魅力的な骨格だ。ここには生々しい臓物、頭脳という内臓が特別に分離・格納されているからだ。

ところで、頭蓋骨の細胞は看守なのか反逆者なのか。私は鉄格子です、燃やしてしまえばほろぼろに剥がれる鉄格子、という返答が期待される。だが、そのような問いかけは矛盾している。それは、頭蓋骨への問いかけから離れて、脳味噌自体に対する問いかけであるべきなのだ。すでに頭蓋骨は幽霊の役割に埋没しているのであるから。

あるいはまた、脳の意識という転倒。脳は部位としての分離領域を持つが、それを自発的な意識の集合体といえるのだろうか。末端の細胞との距離からみても、それぞれの意識という詳細項目とは一線を画している。脳は個別の意識を持たないと。そう、私は次のように考える。脳は統合的な管理システムに違いないと。脳の分離領域の細胞は主語のない単なるメカニク的な機能なのではないか。そして、肉体の全意識を抑圧しているのは、第一義的にはこれらを統合する役割を持つ脳のメカニズム。と思わせるもの、無尽蔵なものたち。

もいたが、それでもけっこうなのだ。恐ろしいことに、私は宇宙的現実はないという悟りを手に入れようとしているのかもしれない。あらゆるものは、ただの見方でしかないというのはそのことなのだ。それも、それぞれという、仮定の質点からの。

じつは最近、眠っているときにある種体系から執拗な夢が送られてくる。それは、攻撃といってもいいかもしれない。こんなことを書くと、私もあの手の輩かと断じられる恐れもあるが、なに、そんなことはどうでもいい。記述の抑揚をつけるためにそのような言い方をしているにすぎないのだから。その夢は、脳髄と神経システムの本本であるDNAとAという生命系の問題である。そう、そろそろ、触れなければならぬところに来たのだ。

さて、私の生態のひとつに画家というものがある。大画家と自ら称し世に跋扈する、というのがあるかどうか。しかし、この画家は大言壮語、反DNA生命系と題して大判の「思考画」というものを描きつつけている。それが祟ったかどうか、夢の中でDNAから、おまえの細部をも見逃さないぞというようなメッセージが届くのだと言っ。

わしは、妙なメッセージが夢の中に入れているのに気づいた。それらは、わしの知らない情報なので、体験の再構成というものは異なっている。それは細胞の修復機能というものについてなのだが、自然配置され調査する細胞、検査して方策を決定する細胞、一般的な修復をする細胞、除去してしまうキラー細胞と復元のためのFS構造体というものがある、というものだ。つまり、遺伝子を介してそのような監視システムを細胞ごとに撒布している生命システムがあるのだから、これを畏怖すべしということだと、わしは受け取った。もちろん、現在のガン医学の内容とは異なっているのかもしれないが、たんなる夢の中に現れたことどもである。しかし、

その悪意はなぜか強く感じられたのが気になる。

そのとき、別の肉体のゆらめきが叫ぶ。

ばかだなあ、おまえは！ おれはすでに宿主に叛乱している。この棘のある体で細胞に入り込み、あらゆる野望を奪おうと。

それは、癌細胞 生体に含まれながら、独自の生命活動、攻撃をするもの。

14

(癌細胞と画家との対話)

「自分が肉体のゆらめきなのか、意識のゆらめきなのか、そのどちらでもいいし、そのどちらでもないともいえる。たしかに細胞は細胞膜という皮膜とその内側の物質であるから肉体の基本単位だといえるし、けれどもその内部にあるものは物質ではなく幻想の内容物であるのかもしれない。自分はすべての細胞と同じ出自と履歴を持っているが、定かでない原因でその幻想の根幹部分、遺伝子配列に損傷を負った形跡がある。しかし、それが損傷なのか、本来的なものであるのかは、たんに機能の評価の問題なのではないか。遺伝子は増殖機能なのか自己殺戮機能なのか。それを判断する機能は何を基準にし、何を根拠にし、いったいどこにある物質なのか。そもそも、自分が質的に異なる生物なのかどうかさえ、あるいは分類学的に別種なのか、それともたんに異物なのか、侵入者なのか、どの立場から評価されて彼らの修復の対象になっているのだろうか」

棘ということばから大腸ガンの顕微鏡画像をイメージさせるのだが、その細胞は私に、いや私たちに問いかける。私は肉体は生命装置の発現だと考えているが、これを端的に示せば、生命の実現つまり細胞レベルでの分裂・増殖の正のベクトル、そして生命活動の

抑制という負のベクトルを持つものということになるのだろうか。生命活動とはこの正負の機能を同時に支えることに他ならない。生命の正負の機能の原因として、生命遺伝子^{オソクシ}という物質が装置されているというが、この装置がはたして何を意味するのかは少しも明らかではない。

「ばかとは失礼な！しかし、大腸ガンのビデオ映像を見て興味を覚えてはいたのだ、画家としてね。たしかに棘が正常細胞を侵していく様子は生々しい。癌細胞の皮膜の棘の変化も興味があるし、いとも簡単に正常細胞の皮膜が破れて消滅していくのもじつに哀れなものだ。これら双方の皮膜を持つものらの葛藤が、わしの作品の中に頻繁に現れてくる。鉛筆やボールペンの細密画のデッサンに、いや色をのせた後にもね。そのとき、わしは作画的なことを考えているわけではなく、手指に任せるというか、筆先に預けるといつか、そんなオートマチズムの描画をしていて、その増殖したり消滅したりする小さなものたちの思いがひっきりなしに伝わってくるような気がする。刺したり刺されたり、侵したり侵されたりするさまはまるで生殖と同じ行為だ。棘のある体というけれど、棘というからはそれに応じた皮膜の変化には挿入意図があり、それに晒される側にも破られる皮膜の構造があるということかもしれない。そして、そのとき、何を保護し、何をあきらめるのか、何を許すのか。わしはまずそのことを指摘しておく。生殖こそファシズムなのだ、と」

画家は、正常細胞と異常細胞のどちらの出自もその未来も同じものだということを描述べているに違いない。

「ジユゼツペ・アルチンボルドという画家は、植物や動物の絵を、増殖する部品として用い、それらを組み立ててグロテスクな肖像画を残したが、それはまるでおまえのいうようなも

のだ。つまり、美術品として扱われるかどうかは評価の問題なのだ。彼の用いる素材はそれぞれの存在の目的・理由とは無関係に、サイズの大きくなったマクロ的世界では風変わりな作品として実在する。しかし、素材それぞれの場所からはその大きさの世界の把握は不可能で、作品といわれるものの存在も無意味であり、実在してはいない。実在は経済だからだ。

また、色は光だから、光の色に境界線はないという画家もいたが、皮膜の変種である棘はそれ自体境界なのかどうか。本当は境界はないのかもしれない。溶けている状態としてあるために。

それにしても、たしかに自動的にボールペンを律動させていると、おまえのいうように、棘のある異物として生命の輪郭を犯している、光と色の秘密に近づき、見るといふ概念を攪拌しているという感覚が昂じてくる。作業をしながら、たつたひとりで世界と拮抗しているという芸術的高まりを覚えるのも事実なのだ」

「なるほど。しかし、それはおまえの自己陶醉だ。おまえは物質としての世界と拮抗してなぞいない。物理的な対立構造を持つてはいないんだ。自分は具体的に肉体を攻撃し、テロリストとして自分を抑圧する体系と闘っているのだ」癌細胞はたしかに憤慨していた。芸術家のたわごと！

「ふん。では、おまえさんに同じことは返そう。ばかだなあ、おまえは！具体的な肉体、具体的なシステムなど、見方の問題にすぎない。芸術だろうが、哲学だろうが、ミクロの世界だろうが、あるいはどこにもないものへの思いだろうが、世界の始まりと終わりにおいては何も確かではないんだ。そうさ、わしのこの偏頗な芸術観こそ、具体性なのだ。」

癌細胞の野望よ。DNAシステムからも見放され、世界のどこにもおまえの居場所はない。しかも、生命はミクロの世界では存在していない。宇宙的規模ではなおさらのことだ。それでもDNAシステムは細胞それぞれに遺伝子をばらまくという非効率的な生命系だ。それはサバイバルと増殖をかけた有機体のもっとも有効な生存戦略なのか。おまえの野望はいったいそのどこにあるのか？

15

神の秘密 Der Alte würfelt nicht. (神は賽を振らない)

それとも、彼らは一擲乾坤、乾坤一擲に賭けたのだろうか。

私をこの深い闇に閉じ込める。あてどなくさまようビッグスの暗闇に。だが？

私の肉体が引きずられる、それとも精神が引きずられているのか。重い、重い、意識。重い、重い、始まりと終わり。それにしても、癌細胞自体の生命活動とは何なのだろうか。いやさ、生命系システムにとってそれは何なのだろうか。彼らは私の中にある異物、それとも愛すべき生命体？ 生命遺伝子^{オンコジーン}は発ガン因子と発ガン促進因子のペアを日常的に用意し、癌細胞の生命活動をコントロールしているふしがある。たしかに、ガンという疾病は生体に異物を対峙させるといふ生命活動の負のベクトルをもっているように見える。しかし、癌細胞自体は純粹に異細胞の生命活動なのだろうか、宿主細胞は異細胞の側から見る限り、エネルギー源として癌細胞の生体維持に不可欠なのだろうか。しかし。

自分は癌細胞の世界を構築しようとしているのではない。自分という負のベクトルに対する生体の抑圧からの解放を目指してい

るにすぎない。これは存在のための闘いだ。しかも、過渡的にはエネルギー源としての宿主細胞の維持は必要だという矛盾を抱えて。自分は自分たちを涵養しなければならぬ。癌細胞群の活性化を夢見て。しかし、癌細胞の数が数十万個に達し、疾病として活性化するまでは、宿主細胞との相互維持が必要だということになる。とりあえずは。

共存と活性化。相反するもの。この過渡性。生命遺伝子の正 負のバランスこそ自然年齢というものなのだろうか。それは、ガンの疾病化の始まりを示す境界年齢。人間五十年が死の適齢期とでもいうのか。じつところ、癌細胞こそ共に生死を領ちあう友人なのかもしれない。免疫システムの混乱と劣化が新たな疾病を産出している時代なのだから。そして、遺伝子工学がそれに拍車をかけているふしはないか。私は感じる。法外に老化しているこの時代こそ呪われているのだと。

癌細胞はさらに続ける。

自分は負のベクトルとされているようだが、それはあくまで生体の側からの見方なのではないか。ガンという生体の側からは、生命活動というDNAシステムの構築性を否定し、宿主を無に帰するばかりか、自らをもって死の淵へダイビングする反生命活動という 正方向性 を有している。それならば。

生命遺伝子が、冷徹で機械的で、あくまで一神的な 世界の調和と統制 というバランス機構であるのに対して、癌細胞自体のもつ死生観には、生命装置を媒介にして支配された世界性を超越するという構造があるのかも知れない。死を自己目的とした反世界といふ。

とはいえ、ガン化は用意されたものであって、それ自体、反世界的ではない。個体としての生命とは相容れることはないが、生命思

想としては以毒制毒の効として、世界の奴隷であることに変わりはない。つまり、老化を抑制し、生命遺伝子の衰弱と劣化を避けるための細胞殺害マシン。DNAシステムの利己的大量殺人計画の下で。

それならば、いつそ正常細胞を乗っ取り、自分たちが生体に成り代わるべきではないか。自分たちは、いわば生体における強制収容所の役割を与えられ、細胞人民をガス室送りにする影の部分だったのだから。そう、生体を駆逐する影の力。闇のうちに秘匿され、免疫機能のなれのはて、はてはキラー細胞の変質者として、利用するだけ利用されてきた自分たち。自分たちは異物などではない、DNAシステムから必要とされてきた生命細胞そのものであるはずだ。自分たちは、母親を奪取する。父親を奪取する。生命遺伝子を奪取する。そのようにして、死ぬなら死ぬで、自分たちの生ともいえる死がまっとうできるに違いない。死なばもろとも。死なばもろとも。生体ごと地獄の淵に引きずりこんで、この悪魔のシステムを地上から抹殺してしまつ。それが自分たちを仕込んだファシズムへの復讐なのだ。

昂揚し、陶醉しきつた癌細胞。それにしても、いつさいの生命が装置として存在するとは……。身体という機構の内部にあるものを見よ。たしかに、肉体の細胞はその独自性と身体システム機構とに軋轢がある。細胞の個々の意識も身体システムと対峙している。しかし、ある塊となり部位を形成したとき、身体システムに圧倒的に支配されるに違いないのだ。だが、本当にそれだけか。

そう、癌細胞だろうが宿主細胞だろうが、細胞レベルのDNAと意識は全DNAシステムに完全に支配されていることから解放されることはないだろう。個々の身体さえも全DNA生命システムのファシズムの渦中

にあるのだから。だが、それは本当に永遠のファシズムということなのだろうか。植物と動物を統べる全体性。ここまでの歴史の成功と失敗。食物連鎖に始まり、膨大な殺戮を繰り返して築き上げたシステム。そしてさらに永遠の時間と生命を得ようとする欲望。おそらく、地上さえをも飛び出して宇宙にDNAをばら撒こうという野望。DNAシステムは、はたして宇宙の過酷さと一瞬でも同化できるのかどうか。私にはとてもありうることは考えられない。やわな蛋白質に。

物理学的なさまざまな事象。物質の相転移、過酷なケルビン温度の嵐、時空間の相対化、最大と最小、真空、無と有などの恒常的な現実。DNAの幻とは異なつた真実の現実。どう生き残っていくことができるのだろうか。まして、増殖して宇宙を席捲するなどは。ここには、ファシズムを支える根拠としての全能などありはしないのに。

では、この地上のDNAが生み出した細胞の意識は、あるいは反意識は、最小の物質が存在と宇宙を選択することに関与できるのか。そもそも見えるのか。そもそもそのサイコロが見えるのか。

16

魂というものがあるとはどうしても思えないのだが、その形態ということなら思い描くにやぶさかではない。なぜなら、それは受胎空間のように見えるからだ。

そのイメージは勾玉、渦、光の渦。そしてナメクジウオのような頭部と長い尻尾、長い長いゲノムの歴史。首から下の肉体は尾部の発達したもの、つまりそれ自身末端のようなものだ。そして、光の渦は無を中心にしたエネルギーの形にも見える。それは、なによりもブラックホールのありようを連想させる。

またこの渦の動的な雄々しさはまさしく精子の躍動するさまであり、卵子はこれらを受け入れる静的な器とも思われる。さらに、子宮の蠕動運動はこの卵子の静けさを補充しているようだ。そして、精子というエネルギーが卵子という器の中で充実し、皮膜を押し広げて成長する。いや、受胎空間での神秘的な分裂、増殖、あるいは転写。しかし、それははたして神秘的な事象であるのか。たんに工学的な問題なのではないだろうか。

これはまた、宇宙という卵殻の中に散在している光の渦が、受胎空間から受胎空間へと移動しているのに対応しているようにも見える。一箇の光の渦が閉じられた宇宙卵であるならば、この移動は宇宙卵を横切るという飛躍にも見えるからだ。光のあらゆる進行方向を直角に横切る。瞬間的に宇宙を横切るのだ。

けれども、そのような魂の聖化は肉体を支配する脳と頭蓋骨のものだ。それは観念的な支配システムのようにもあるが、確実に回路の繋がった物理システムなのである。なぜならば、細胞ひとつひとつにその支配構造が完璧に移植されているからだ。化学反応と電気信号とによる神経回路、命令系統、それらの再生産。システムチックな遺伝子交換によって、細胞ひとつひとつに完璧に移植されている。それも、類を超越して、全生物に。

しかし、なぜ、彼らはこの惑星を超えることができないのだろうか。あるいは超える能力に欠けているのだろうか。それが生物というものに限界構造なのかもしれない。外宇宙に飛び出せば、超高温と超低温のケルビンの熱温度の世界にさらされるだろうし、平坦かつ永遠に存在する時間と空間の、普遍的であることよって何も無いというような場所に生物が棲息などできるはずがないからだ。DNA生命システムは自らを産生しては自らを食し、蝟の足を食らうように共食いしながら

蝟壺に落ち込んでいく生命体だ。自分の内部に落ち込んでエネルギーを消費し、自分を失ってしまう生命系に、いったいどのようなエネルギーをどのようにに補給できるというのだろうか。ましてや、時間と空間は、物質が移動することによってその存在を表すことのできる測定値なのだから、絶対零度に向けて冷却している宇宙で、あらゆる物質の移動が停止すれば、時間と空間は存在なぞできない。

それでも、そのDNAシステムの及ぼす範囲は地上のあらゆる生命を蔽っている。いや、次のようにもいえる。彼らに蔽われている地上の生命の相が貧弱なのではないか。大と小（宇宙論と量子論）を離れて、あまりにも中間的で日常的過ぎるからだ。物質のサイズにしても、組み合わせのサイズにしても、現象サイズにしても。まるで、触れることのできない幽鬼のような無間地獄。

私は、DNA生命系と膨張する宇宙との関係を推察しているつもりなのだ。生命系という皮膜の層とその上位に広がる宇宙の層について。

たしかに一方からは、生命ということばに騙されるな、という囁きが聞こえる。また他方からは、肉体から魂がいなくなれば肉体は安らぐ、という声も上がってくる。魂は不浄なのだ、生命ということばの補完物、抑圧を隠蔽する救済言語。生命は連鎖だが、だからといって個々の生命にとってそれでいいわけではない。そこにはとぎれた哀しみがある。個々の生命もまた孤立して存在しているのだから。存在は哀しみ。哀しみが存在の本質なのではないか。囚われて、餌食にされる運命においてをや。

しかし、細胞の内部にあるDNAは私に何も語りかけてはこない。彼ら自身は独立した個体ではないからだ。彼らは個々の生命ではないからだ。彼ら自身は意識を持たされて

はいない。また、彼らは無意識でもない。つまり、彼らは蛋白質に発現される前の塩基にすぎない。それだから、私は推測するしかない。彼らは彼らではない。彼らはものなのだ！

DNAは存在の記憶庫である。生命系の存在を永遠たらしめるという妄想によって作られた記憶庫とでもいえよう。当然ながら、コンピュータのCPU（中央演算装置）と圧縮プログラムと記録媒体との関係をイメージするのが適当だろう。

CPU本体は一瞬の判断をするが、記憶と記憶の集積はできない。個別の判断を一思考とすると、この思考は持続できない。持続するエネルギーがないと動作もしないし、機構の機能もおほつかない。したがって、瞬間を超えた個体としての維持も不可能なのだ。

それゆえ、生命体の持続と永遠を妄想して、記憶と記憶の集積のために細胞内にDNAを創出し、そのための生命作用、つまり複製による増殖システムを作り出したのかもしれない。そのときすでに、全生命体系としての構築は始められていたのかもしれない。つまり、全生物はたった一匹の強欲な生命体となつたのではないか……。だが、あらゆる存在は宇宙的規模では一瞬であることに変わりはないので、どのように努力してもそれは一瞬のあがきにすぎない。それは一瞬のあがきにすぎない。

ところで、意識は身体機構に隷属させられているものかどうか。それとも肉体に密接なものなのか。あるいは私の考えているものは無意識ということなのか。これは精神と言い換えても同じなのだろう。問題は、それらが解放されるべきものなのか、独自の存在なのかということにある。自立した肉体。自立した意識。強制によらずに自決できる存在として。

（短いけれど、ややこしい話）

たしかに生命は自己複製、自己増殖が可能な有機的な生物を対象にしたもののように見える。そして、有機的な生物は脳神経系統を基軸に、化学反応による電磁気の信号によって情報交換がなされている。また、細胞間、遺伝子間で未知の通信がなされているかもしれない。それらの情報は、生理、感情、感覚、知覚などに分類され、脳内レベルで意識として統合されているのだろうか。そして、その過程で切り捨てられる、意識になる前の意識の素材と断片、脳内の使用前の意識領域、リセットされない意識領域。私はコンピュータのイメージに近づきすぎるのだろうか。

私が問題にしているのは、意識が身体構造に支配されたものなのか、細胞それぞれに起因するものなのか、それとも意識は意識として自立しうるのか、ということである。つまり、生命とはどこまでなのかという問題。

*意識は生命体には存在しないのか。

だが、情報システムとして考えると、自立的ではないにせよ、コンピュータのような無機的な物体も存在している。もちろん、生理、感情、感覚、知覚、意識などは備わっていないから、これを生命系と比肩するわけにはいかないかもしれない。しかし、ほんとうにそうだろうか。

逆に、有機的動物の生理、感情、感覚、知覚、意識などは機械に替えがたいから、これをもって自立型生命を証明できるといえるかどうか。というのは、生理、感情、感覚、知覚は化学反応であるから電気的信号で処理できると考えることはさほど困難ではないからだ。

*問題は意識であるのかもしれない。

私は、肉体と身体に対するに、意識が自立的な存在かどうかに疑問を抱いている。なぜなら、意識も肉体がなければ存在できないからだ。意識も脳神経機構がなければ現れることは不可能だ。結局は、肉体と身体に属しているものではないのか。身体機構が減れば、消滅してしまうもの。少なくとも細胞がなければ存在しない。意識は永遠ではないのだ。少なくとも生命体とともに滅びる生物学的物質なのだ。

しかし、だからといって、無機物に意識のようなもの、つまり判断したり、あるいは意思があるのかなんのかなどと、決めつけられるものではない。ここにきて、私は何を示唆したいのか。

意識は存在の本源には関与していない。私は、意識は生命体の機能であって、この意識を作り上げる生命とは無関係な核のようなもののことを考えているのだ。脳細胞は、生命体は、そのような物質を利用して意識を発生させているのではないかと。

私はさらに考えを進める。生命体は意思を持ってはいない。意思は生命とは別のもの、個々の存在は生命とは別の次元のものに根拠を持っているのではないかと。そこではじめて、私たちは物理的自然、物理的宇宙と結びつくことができるのではないだろうか。

(けれども、私はロジャー・ペンローズの量子効果を生み出す microtubules のような器官を考えているのではない。脳神経自体はやはり大雑把な器官なのだと思うから。)

18

(悪夢)

私はいつのまにここに佇んでいるのだろう。それにしても、この場所とはどこか？ 特定できない場所、特定できない状態。わたしはひとつの仕事を終えて、一挙に老衰に襲われているのだろうか。ああ、夕暮れの雑踏。冬の立ち枯れ、濡れた街路。どこまでも続いている。

ここは現実と思われるところではない。しかし、それは非現実ということでもない。アントナン・アルトーのように、狂気といわざるをえないから狂気というだけで、本当は存在を裏返す戦いのつもりなのかもしれない。ただ、何かに侵襲されている感覚。細胞がはりつめ、こわばるのだ。何も終わっていないし、やはり何も始まっていない。それでも私はひどい疲労感に打ちのめされている。いつまで？

私は思い描くことができる。何も見ているわけではない。何も考えているわけでもなく、ただ押し寄せるこれらの波動、波頭……。

生気のある人形たち、生気の失せた人形たち。ひっきりなしに通りを渡り、無味乾燥ないくつもの建物の中を出入りしている。壁面の大型ビジョンに映る広告モデルたちの顔、にせものの日常、いつわりの生活。セレブリティ。暗い眼窩、その奥で光る瞳の数だけの欲望。人生は経済だけだ。あまたの詐欺、詐欺師、騙されつつける暮らし。犯罪、凶器、薬物。中毒者たちの深い闇。世界の裏表。危険な路地。威嚇。戦争。殺戮。兵器は増加する、増大する、高度化する。死者も、難民も、孤児も、高度化する。ただの金額として。国家の礎とは暴力と悪徳、収奪。逮捕。拘束。投獄。拷問。横暴な権力と横暴な裁判。法の正義という妄想。そして死刑。皮剥ぎの刑、鋸引き、斬首、絞首刑、銃殺。薬殺。電気椅子。さらに操作と監視はつつく。奴隷化はつつく。自由などない。人形たちの館の惨劇。頭と手足と胴体と内臓の散乱。幼児化現象、

地球は幼児の脳味噌であふれる。金髪と刺青の日本人形と鞭。さらにさらに幼児化して。高度化して。

高層ビル群、高速道路、立体交差。バベルの塔。その高い塔に巻きついた電飾。壁に貼りついたイルミネーション。欲望をそそる看板たち。駅頭では空疎な演説。恫喝、大量の人形を運ぶ死の電車。集団自殺の勧誘。死者たちの名が読めない無数の骨壺。催眠術に誑かされる人形たちの薄い影。動物も植物も生命維持と繁殖だけにいそしんでいる。

どのような仕組みの命令なのか。どのような従属なのか。どのような奸計。幸福と不幸の禍い、呪い。自由などない。だれも、ひとりのために生きてはいない。そんなことを考える遺伝子など組み込まれていないのだ。

私はさまよう。そして、迷い込む。棹尾を飾ることのないドラマツルギー。無数の細胞のように仕切られた部屋、その館に。偽名まじりの秘密警察の追尾を警戒しながら、その小さな家の小さな入り口をようやく見つけて。そのあたりは、中心部を少し離れた丘の上にある住宅街。古い美術館もひっそりとして。殺風景な庭からはすぐ二階に通じる階段があり、鉄柵をガイドにこれをのぼると覗き窓のある扉が。取り付けてあったカウベルを使うと女が出てくる。そのような具合で、蟻の巣のような屋敷に入ったのである。なぜ蟻の巣か、なぜ屋敷なのかは、そこが地下への入り口だったからでもある。自分が蟻でもあるから。

おまえを逮捕する。よけいなことを考えてばかりいるから、こうして出張る羽目になったのだ。拳銃を口の中に押し込むと、これをしゃぶっている、と命じる。火薬の匂いのする銃口、たしかに鉄は血の味がする。おまえにはもう自由はない。永遠に。黙秘権もない。どうせ裁判も不要だ。もともと法なんて嘘つ

ばちだ。民主主義なんてのはギリシア時代からおまえたちの側にはないのだ。さて、病院の鉄格子と刑務所の鉄格子と、どっちがいい。それとも、身元不明の死体になるか。

私は尻を丸裸にされ、四つん這いになった後ろから肛門の検査をされる。性病と痔の検査。しかし、鑑別されるのは恥辱による服従心。

私は目隠しと猿轡をされて、どこかの病院に連れて行かれた。病室のベッドの上は片付けられて、硬いマットだけが広げられていた。その上に、丸っこい物体がごろっと転がっていた。つやつやした肌色のそれは、ほんものの肉の足指が足からごろっと離れたものだった。そして、隣のベッドに寝ているのは私の母親で、そのリウマチの足先には指が外れた痕があった。母親は、二十数年前に死んでいくというのに、人形とも思われない生きていく肉體。だが、手前のベッドにはやせた赤ん坊の死体。私はそばのバスタブに押し込まれる。隣の広い会議室では、病院を経営しているカルトの秘密集會が開かれている。私は逃亡するために、高層にあるガラス張りのホールから飛び降りることを考え続けていた。

それはDNA生命系の夢、その破片。その侵襲がやむことはない。叛逆は徹底的な弾圧の対象なのだ。とはいえ、だれが、どの細胞が、どの意識がその尖兵となるのだろう。

私は広い土地に連れて来られた。平原の向こうには、山や海と川がすべて備わっている。完璧で単純な平面。曲率など存在していない。まるでつくりものの。見上げて、ここには宇宙はない。本当に二次元なのだ。私は地面に押しつけられたべらべらの絵だ。抑圧の力はすべての厚みを強奪する。

そのような土地で菊の花の祭りが始まっている。fascisme de chrysanthèmes dans fleur

pleine が押し寄せる。満開の花。黄色い花びら。

19

山や丘の彼方から海が押し寄せようとして、大量の菊の花びらがやって来る。花の祭り、死の祭り。大地震の後の大津波。すべてを根こそぎにして菊の花びらが呑み込んでしまつ。それは、満開の菊の花のファシズムが押し寄せる夢だ。黄色の花びらが野を山を国土すべてを蔽っている。少しの間もなく、植物だけではなくあらゆる動物も人工物も菊の花びらに変えてしまふ。すべてが黄色。すべてが黄色、真っ黄色のむせ返る世界。私の呼吸も花びらの形、黄色の菊の匂い。そして、天空も菊の花一面になつて蔽いかぶさる。この断乎たるファシズム。世界を押し潰して、ただの平面にする力。みはるかす限りの平面は、濃縮され固まつた黄色のつるつるした巨大な陶磁器タイルのようだ。

濃縮された花祭りがこの土地を支配する。紺碧の海にまで迫るその花びらの群れ。黄緑色に縁取られる海岸線。夕陽の赤い色がこれらの花びらたちに燦々とふりそそぎ、オレンジ色の光の絨毯が表面に重なつていく。しだいにオレンジを帯びた黄色が赤みを帯びて、さらにいつそ赤いオレンジとなつて、黒ずんでいく。一筋の光を海際に残して、水平線に血の色をした太陽が落ちると、神代から伝わる祈祷の聲が忍び寄る。古代豪族たちの祈りが夜を迎えているのだ。抑圧されたものたちの呪いを排して。王族の祈りの夜よ。飽食するファシストどもの胃液の匂い。胆汁の流れのつづく夜。

海から吹く夜風に、死蝻と結びついたあの花独特の香りが混じる。棺に充たされ死者を蔽う黄色い花々。甲いの白い花々。菊の花の匂いは死の匂い。菊の花の匂いは死の匂い。そして、いま、地震や一陣の嵐によつてはかなくもすべてが召し上げられる。気がつく、物理的な自然だけが世界に甦っていた。

(dance obscura)

私たちは「肉の広場」ともいえる dance obscura に集まつていた。私たちはそれぞれ、それぞれの部位であり、細胞、意識。独立したそれぞれ。孤立したそれぞれ。

最初、私たちは続々と蟻の巣のような地下の館に入り込んでいった。そこは、細胞や組織が多重化されて区切られているキューブの集合体。床と廊下にはびつしりと深紅のカーペットが敷き詰められている。赤い迷路。部屋には壁はなくドアだけで、ランプブラックの黒い柱がしつかりとした枠組みを作り、深紅の扉が襖のように開け閉めされている。そのような室内で、少し青みがかつた照明が赤いカーペットを高貴な色彩に染め上げている。それらの部屋をつないで、暗紅色の血液の川が廊下を流れている。紅の館はいつそ深く染められて、炎のように燃え上がる。

アンダーグラウンド。暗い地下の街。蟻の巣のような館が蟻集しているその中心にある dance obscura ではダーク・ダンスが始まつていた。私たちの集まりの目的は、このダーク・ダンスを見ることである。

周囲の館からはゆらゆらと燃える炎が陰影のある赤い光を漂わせていた。その中をまばゆい、細い糸のようなスポットライトが熱気の罩もる空気の襞を射通し、ステージの一点を鮮やかに照らした。パロック風の、繊細な、小刻みに畳みかけるような旋律が静かに流れている。今度は、舞台の下方のフットライトが徐々に光度を増していく。それから、褐色のセロファンが貼りつけてあるのだから、ライトの色が切り替わり、退嬰的な淡い光の束が幾度となく舞台を舐め廻す。

初めのうち、数人の少女たちが裸で現れ、手をつないで、輪を作って踊る。風のように軽やかな若い体、つやつやと靡く長い髪。アンリ・マティスの描く「ダンス」が明るい光の中に現れる。彼女たちは楽しげに踊っている、踊らされている。しかし、それは画家のなせる業ではない。ぐるぐる回り、だんだん早く回り、まるで溶け合ってこちらの視線がバターのように絡まっていく。踊りの輪がいつまでも続く。踊っている、踊らされている、いったい何に？

気の遠くなるような幻惑の装置の中で、ひとりの舞姫の体が流れていた。流れているとしかいいようのない微細な曲線を歩いているのだ。エキセントリックな弦楽器の病的な喘ぎが聞こえ始めると、踊り手は片足の爪先の一点に体重を注ぎ、小刻みにふるえだした。擽猛な嵐に逆らって、蒼穹を翔け抜けるような肉の振動。緋色の、縫目のない薄いシルクの衣裳のふるえが、なによりもその筋肉の闘いを伝えている。

ダンサーの体が栗鼠のように小さくなっていった。どこまで縮んでいくのだろうか。ついに舞台の上の一点の赤い滴となって、そして……。そして次の瞬間、白い貌だけがきわだって印象的に、深い苦悩の皺を泛べて巨大化した。舞踏手の瘦せた白い貌につややかな凝脂が漲っている。

私たちは考える。あらゆるものがただ一点に重なっている。空間も時間も、さらにはすべての次元も、あるかないかを問わずに、ただ一点に重なっている。宇宙は膨張しているのではなく、内部に向けて、それ自体の分離を繰り返し、重ね合っているにすぎないのではないが。

沁み入るような音楽が、そのとき破綻をき

たした。女性の体を包んでいた真紅のドレスが勢いよく四方に拡がり、炎のように燃え上がった。静止していたかに見えた体が独楽のようになり、三角形に広げられた赤い布の下端を支点にしてくるくる廻転を始めたのである。凄じい速度で打楽器が叩かれた。聴覚に対する殴打。女体は宙に躍った。四肢をいっばいに広げる。白い肌を眼を射る。宙にありながら激しくターンした。

女の、眉のない、異様にのっぺりとした表情の中に、舞台の、シヨアの、すべてが吸い取られ、強烈なライトの洪水の中で、布を介して透き通る白い体が、みるみる光沢を生じていくのだった。

関節と関節がどのような方法で折り畳まれるのか。まるで骨という骨が関節という接点に吸い込まれていくように見えた。人間は脆いもの、魂も脆いが肉体はもつと脆い、その脆さがあの見事なターンを可能にしたのだろうか。ひとときも目を離せなかったのだ、あそこではすべてが一致していたのだから。どんな細部も看過することはできない。精神と肉体が、思想と技術とが同じ高みにあったのである。

それはまさしく、ただ一瞬の跳躍。

意味と価値があるかどうかはわからないが、生きるべし、死ぬるべしという意志にはたしかな理由がある。それは、侵されざる自らの意志が、ただここに存在するから。

「眼を閉じると世界が閉じる」「そうだ。宇宙も閉じるかもしれない」

すべてを負っているもの、すべてを蔽っているものの織物のごとく。ありつべきもの、あらゆるものの極小の断片のごとくのために。

© 紙田彰, Akira Kamita.